

序

昭和27年4月、美術工芸・建造物・歴史の三研究室と庶務室とからなる定員15名で発足した奈良国立文化財研究所は、今年で三十周年を迎えた。その間に、建造物・歴史の二研究室、平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部と庶務部からなる三部二研究室、さらに埋蔵文化財センター、飛鳥資料館を付設する96名の定員を数える組織へと発展した。これはひとえに文化庁はじめ関係各位の御指導と温い御支援の賜物と深く感謝する次第である。

今回の学報は、朱雀門（学報第34冊）の北500mからはじまり、推定大膳職地域（学報第15・17冊）に至る南北約320m、面積約380アールの地域に関する発掘報告である。発掘は昭和40年の第27次調査にはじまり、昭和54年の第117次調査まで前後12回にわたった。この地は古墳時代に小規模な古墳も営まれ、佐紀盾列古墳群の南西端に位置している。歴史時代に入ると下ツ道が中央を南北に縦貫しており、平城京そのものも下ツ道の中軸にして設定されていることが明らかとなった。平城宮造営にあたっては、北部に埴積の大規模な施設がつくられ、中央に木階、左右に斜路を設けた例のない設計を行ない、その奥に大極殿を配する壮大な計画を示している。これに対応して南約220メートルに門を設け、後にこの地を荘厳する巨大な東西楼を増築する。このような宮殿配置は、わが国の古代宮殿に例をみないところである。その後、孝謙朝に埴積の壇を埋めて南北に軒をつらねた殿舎が営まれる。それは平安朝の内裏をしのばれるような殿舎で、個々の建物の独立性が強い東方の内裏地域（学

報第16冊)と大きく異っている。九世紀に入って平城上皇の時期にも再び中心的な宮殿の地に選ばれているが、規模は縮少し、明治以来この地域に残っていた土塁が実は最後の姿を示していることがわかった。

この地域の発掘は、平城宮の中心部の変遷を具体的に明示したのであるが、古い時期の遺構は痕跡的にしか残っておらず、結論も所内で議論を重ねての結果とはいえ、将来異なった解釈を生ずる余地を残している。事実を主とした資料を一日も早く提供することに主眼を置いたものと御理解いただければと考えている。

昭和39年に平城宮跡発掘調査部が発足して以来、この地域の調査が平城宮跡発掘調査の一つの柱となっていた。その調査報告書を、奈良国立文化財研究所設立三十周年事業の一環として出版できたことは大変喜ばしい。また、発掘にたずさわった多くの人々のうち、他に転出された方も数多い。それらの人々に対してもその労を感謝したい。

最後に、内容その他にわたって忌憚ない御批判と、御鞭撻を賜りますことを御願ひ申し上げます。

昭和57年 1月

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足